

『イケメン霊能者チャクラ王子』と茶倉^{ちやくら}練^{れん}に独占インタビュー！
 霊能力に芽生えたきっかけは？ 霊界って本当に存在するの？』

記者…はじめましてこんにちは。本日はよろしくお願いします。

茶倉…ご丁寧にどうも。こちらこそよろしくお願いします。
 記者…本日は巷で話題のチャクラ王子のプロフィールを徹底深堀り調査ということで、色々お話を聞かせていただければと思います。

茶倉…はは、お手柔らかに（笑）。幻滅させて申し訳ないですけど、僕のプロフィールなんて面白みありませんよ。

記者…何をおっしゃる、チャクラ王子といえぱすつかり時の人じゃないですか。実は私もチャクラーです（笑）

茶倉…光栄ですね。

記者…ご出身はどちらですか？ かすかに訛りがあるような。

茶倉…大阪です。小5の時に両親が事故で他界して、東京の祖母に引き取られたんです。

記者…拝み屋をされてるお祖母様ですね？ 政財界の大物を多く顧客に抱えてらした、その道の有名人だとか。

茶倉…ええ、まあはい、そうです。母方の祖母は拝み屋だっ

たんです。物心付く前から人の未来や幽霊が視えたとかで、両親の事故のことも予言してたんです。

記者…そうなんですか？

茶倉…「じゃあなんで回避できなかったのか」って顔に書いてありますね。答えは簡単、うちの親がオカルト全否定派だったんです。特に母が毛嫌いしてました。後を継げって祖母にうるさく言われて…反面教師ってヤツですよ。父と結婚後も絶対娘を産めって圧力をかけられてたみたいです。母方は女系霊能者の家系なんで、男は無能で用なしと見なされてたんです。娘がダメなら孫を跡取りに据えようなんて、とんだ因業ババアです。母にも拝み屋との見合いを斡旋してたんで、駆け落ちは大正解じゃないかな。競走馬の掛け合わせじゃないってのに（笑）

記者…お祖母さんとは仲が悪かったんでしょうか？

茶倉…両親に代わって育ててくれた慈善精神には感謝しています。当時はまだ小5でしたからね…彼女がいなけりや路頭に迷うところでした。けどまあ、ぶっちゃけ反りは合わなかったな。祖母は性悪でしたんで。15で孫に追い越されて、その事もやっかんでたんです。

記者…追い越したというと？

茶倉…祖母のやり方は古いんですよ。一対一で依頼人の話を聞いて、段階を踏んでお祓いする。僕ならそんなの飛ば

してすぐ祓えます。ポテンシャルが違うんですよ、ポテンシャルが。

記者…お祖母さんのもとで修業を積まれて、霊能力に開眼されたと聞いてますが……。

茶倉…きつかけにはなりましたね。祖母とは事業を起し上げる時に絶縁しましたが、僕が立派に自立して喜んではずです。

記者…茶倉さんは常に体内でチャクラを練っているそうですが……。

茶倉…学生時代に半年ほどインドで修行しまして、その時にチャクラの練り方を体得したんです。チャクラはご存じですか？ 人間の体内を循環している生命の源、気です。

コイツを自由自在に操れるようになったら誰でも霊能者になれますよ、霊界と交信を可能にするチャネルが開くんです。

記者…茶倉さんはそのチャネルを常に全開にしているんですね。

茶倉…常に、というと語弊があるな。日常生活に支障がでるんで普段は閉じてます、開けるのは仕事中だけ。

記者…茶倉さんにはどんなふうに霊や霊界が見えてらっしゃるんですか？ 「レイヤーの異なる世界」とよくおっしゃいますか？

茶倉…たとえるならVRやメタバースでしょうか。

記者…はい？

茶倉…一種の仮想現実ですよ。現実にもう一枚、別のレイヤーが重なってる。だから疲れる。何十時間もぶっ通してVRやってたら目がチカチカするでしょ、アレと同じです。ハマりすぎは危険なんです、戻ってこれなくなる。別の世界を覗くことは脳に過大な負担をかけますからね。

記者…なるほど、勉強になります。では靈感をどうお考えで？ 一生死ぬまで霊を見ない人もいれば日常的に見まくる人もいますよね、両者の違いはなんでしょうか。

茶倉…貴女は花粉症ですか？

記者…え？ は、はい。

茶倉…なるほど、ならば花粉症に関する最低限の知識はあるはずですよ。アレは人間の体内に一定量のスギ花粉が蓄積された結果に起きる、アレルギー反応です。なので一生ならない人間もいれば、まだ幼児の段階で発症する人もいる。個人差があるんです。

記者…靈感も同じだと？

茶倉…ご明察です。靈感自体は全人類に備わっていますが、それが生きている間に目覚めるかどうかはなんともいえません。僕たちはごく初期の段階で花粉症になり免疫が付いたがゆえに、有効な対策を講じられたんです。アレルギー

が酷い人だつてきちんとした治療を施せば回復します。

記者…幽霊の存在を信じない人たちに証拠を出せと言われるたらどうなさいますか。

茶倉…花粉症の苦しみは発症した人間にしかわかりません、エビデンスの提出を求められても困難です。僕にできるのは効率的な対症療法を示す事だけ、それでお客様にご満足いただけるなら本望ですね。

記者…非常にわかりやすいたとえをありがとうございます。経歴の話に戻しますね。中学卒業後はどうされたんですか？

茶倉…地元の高校へ。最終学歴は慶応大経済学部卒です。

記者…その後は23歳で個人事業主として独立、オカルト関係の悩み相談やトラブル解決を引き受ける『tyakuraスピリチュアルセラピー』を起ち上げました。現在の年収は……茶倉…秘密です。公開したら品がないでしょ？

記者…公式サイトでは輸入品のパワーストーンを高額なお値段で販売されてますよね。

茶倉…高額かどうかは購入者に還元された利益率次第じゃないかな？ 僕が勧めるワーストーンはそのへんのパチモンと違って純正の本物、効果は折り紙付きです。身に付ければ癌も治ります。病は気から、根治はチャクラからです。ちなみにレンタルもやってます、ご用命ございましたらお気軽に。このブラックオニキスの数珠なんてお手頃ですよ、

一週間10万円。シルバーのチャームは天使と妖精と猫ちゃんの三種類選べます。

記者…持ち歩いてらっしゃるんですか？

茶倉…記者さんは天使がお似合いですね。どうぞ、サービスです。

記者…あ、ありがとうございます。

茶倉…どういたしまして。銀には魔除けの効果があるんですよ、中世の貴族が銀食器を愛用したのは銀が毒に反応する性質を持つてたからで……僕の腕時計もシルバーなんです、ご覧になりますかヴァシユロン・コンスタンタン

記者…現在はご自宅のタワーマンションでお仕事をされてるとか。

茶倉…高校時代の友人が一人、助手として通ってくれてます。

記者…その方にも霊能力が？

茶倉…彼はとても厄介な特殊体質に悩まされて、それを克服するために長年僕の事務所に通ってるんですよ。とはいえ貧民の友人に従来の報酬は払えないので、雑用係として働いてもらってます。現状粗茶を淹れる位しか役に立たないけど、場を和ませる役割はギリギリまっとうしてるかな。

記者…最後にお聞きします。茶倉さんはとても珍しいお祓

いスタイルをとられてるそうですね、どういったものか具体的に教えていただけませんか？

茶倉…秘密です。この業界は信用第一なので、個人情報に關しては守秘義務を遵守します。

記者…そこをなんとか。

茶倉…どうしても知りたければ事務所にくるといい、特別に教えてあげます。憑かれてますよ、あなた。

俺の十年來の腐れ縁の茶倉練、通称チャクラ王子はエセ霊能職者だ。

茶倉の住んでるマンションは世田谷の一等地にある。政財界の大物やその愛人、ならびに芸能人が多く住むと評判の高級タワーマンション。当然パラッチはお断りだ。

外観はとても洗練されており、俗物の代表格のインチキ霊能者が暮らしているようには見えない。アイツの性格を考えりや悪趣味な金ぴか御殿の方がよっぽどお似合いだが。

「！　ッ」

タワマンに続くかな坂道を歩いてる時に嫌な予感があった。

右手首を一瞥すりや、本来は澄んだ紫の数珠が瘴氣を吸って濁り始めている。

まずい。危険な兆候。

こめかみをツーツと汗が伝い、到着するなり玄関横のボタンをせっかちに押す。だんだん熱を帯びてきた数珠を左手で庇い、一粒一粒滑らかな玉を擦って気を逸らし、早く出ると目を瞑り念じる。

何度味わつても慣れない嫌な感覚……数珠が静電氣を纏ったかのようにパチパチし、足元が抜けて奈落の底に引きずり込まれるような不安感が追い討ちをかける。

「算盤でも弾いてんのかよ、とつとと出ろよ」

王子が御座すタワマンの天守閣を睨み付け、内股でもぞもぞ足踏みする。片手にぶら下げたビニール袋がやけに重い。しばらくして回線が繋がり、氣取った声色の標準語が応対した。

『はい、「SS代表の茶倉ですが』

「俺だ」

『理一か。遅いわ』

よそ行きの声が一気に不機嫌になる。俺が知り抜いた茶倉練の本性全開の、邪険に尖った声色。

『メールしたもん買ってきたか』

「ハーゲンダッツの新作だろ？　ちゃんと買ってきたよ、とつとと入れろ」

『せからしやつちやのウ』

「しんどいんだ」

『また拾うてきたんか』

芝居臭いため息に続いて事務的に確認。

『数珠は？ 何個イッた？』

「無事なのは三粒だけ。殆ど黒くなってる」

『時間ないな。どうしてもっと早く来んの？』

「こつちも色々忙しかったんだよ家庭の事情で」

『あー、実家帰つとつたもんな。お疲れさんでお憑かれさ

んか』

絶対じらして楽しんでやがる。震える握り拳に怒りを押さ

え込んで懇願する。

「頼む。早く」

『しゃあない。入れ』

自動ドアがスムーズに開き漸く立ち入りを許された。安堵

で腰からへたりこみそうになる……が、まだだ。不自然に

機械的な動作で右足を前に、左足を前に出しエレベーター

に急ぐ。

4基並んだエレベーターの右端に飛び乗り、壁面の操作パ

ネルの一番上、44階のボタンを強く押す。

ドアが閉じると同時に壁にもたれてずり落ちていく。右手

に巻いた数珠のブレスレットは全体の三分の一ほど黒く染

まっちまっていた。

「!? 痛ツツ、」

二重に巻いた数珠がギチツと手首に食い込む。血管が圧迫

され、腕を拉ぐ激痛が走る。

高校の頃から数えていい加減慣れっことはいえ痛いものは

痛い。俺はマゾじやないんで痛いのは大嫌いだ、セルフ緊

縛SMの趣味はねえ。

エレベーターはスムーズに動く。

犯罪防止の為だろうか背面の壁には等身大の鏡が嵌めこま

れ天井の隅には防犯カメラが設置済み。ユニクロで揃えた

上下でタワマンに来るなんて場違いなんだろうな、と卑屈

な思考が過ぎり猫背で隅に移動。

腹立たしいことに、エレベーター内の面積だけで俺のアパー

トのユニットバスがまるまる入っちゃうくらいの広さがあ

る。

こんな状態でさえないけりや空調が利いてて快適に思えたは

ずだが、今は焼け数珠に水状態だ。

「あの……」

「ツひ!?」

うなじの産毛が一斉に逆立った。不意打ちに悲鳴を飲み込

んで振り向く。あろうことか、エレベーターには先客がい

た。

ちょうど俺の対角線上、左後方に表情がやけに暗いサラリー

マンが立ち尽くしているのだ。平常心の回復を待ち、一応は敬語で聞き返す。

「何でしょうか」

「トイレですか？」

ちげえよ！

「持病の発作です。気にしないでください」

「はあ……」

尿意をこらえてると誤解された。心外だ。

無駄に高いタワマンの、じれつたいほどゆっくり上昇する箱の中で意を決し、またもや振り向きざま会社員が切り出す。

「ホントのこと言ってください。漏らしそうなら」

「漏れねえから」

「水筒持ってるんで」

「水筒を尿瓶にするほど落ちぶれてません」

「終わるまでそっぽ向いてますよ」

気遣いが痛い。

「ていうか俺がトイレ我慢してる前提で進めんのやめてくれる？」

「じゃあなんで端っこでもじもじしてるんですか」

「ほっとてください」

さりげなく右手首を庇い隅っこに寄る。頼む早く最上階に

付いてくれと狂おしく祈り、虚しい凝視を天井に注ぐ。防犯カメラは正常に作動中。

「そのプレスレット、色が変わるんですね」

「ッ!？」

心臓が止まりかけた、マジで。

囁き声にびっくりし咄嗟に振り向けば、すぐ後ろに会社員が張り付いていた。まるで接近の気配を感じなかった。現代の忍者か。忍者めしが常食か。

「本場ブラジル産の珍しいヤツだから一粒千円はくだらねえ。多分」

うっかり口を滑らしたあと、単価でマウントとつちまった安っぽい見栄を恥じる。しかもちよつと、かなり、盛った。

俺の誇大広告を鵜呑みにし会社員が感心する。

「魔法みたいですねえ。どこで買ったんですか」

「ダチにもりました」

「お友達は宝石商で？」

「詐欺師です」

打てば響く調子で即答する。会社員は冗談だと思ったらしい。

「もつとよく見せてください」

「ちよ、半径一メートル内に来ないで!」

会社員が前屈みになる。パーソナルスペースを侵害された

動揺で、視線がブレた瞬間固まる。背面の鏡に会社員が映っていない。

映っているのはグレイの「シャツにチノパン、この世の不運を一身に背負ったような眉八の字の男だけ。ベリーショートに刈り込んだうなじにばっちり鳥肌立つてるのまで見えちまった。

「さわんな!」

「っ!」

慌てて制すも遅い。案の定、男の手が数珠に触れた瞬間弾かれた。

「どうして……」

焼け爛れた手のひらを見下ろし、会社員が呟く。シヨックに剥かれた目、放心した表情、青ざめた唇。

「なんでなんでなんで?」

単調に繰り返す声には感情が欠落していた。見開かれた目は瞬きもしない。俺は壁に張り付いてあとずさり、声をひそめて聞く。

「あんた……何があったか覚えてる?」

「仕事が早く終わって、家に電話して、そしたら絵里子が出て。子どもの卒園祝いだからご馳走用意して待ってるって」

「今は5月だぞ」

会社員の顔に純粋な混乱が生じる。

「そういえば僕、なんでエレベーターにいるんでしょうか? 早く帰らなきゃいけないのに」

すかさず操作パネルに飛び付き44階を連打、対する男は凍り付いた無表情のままなんでと繰り返す。

「あうっ!」

右手の数珠がさらに手首に食い込んでどす黒く染まり、ビニール袋を落とす。

袋からなだれた雑誌には「心霊トラブルはチャクラ王子におまかせ!」の見出しが躍り、いけすかねえ天敵が表紙で白い歯を光らせている。

反射的にスマホの短縮を押し、スピーカーに設定して叫んだ。

「聞こえてるか茶倉、とつとと来い!」

しまいにはキレてガンガン壁を蹴り付ける。大声で叫んでも答えはない。背後にたたずむ男の両目の焦点が、虚無の彼方へ遠ざかっていく。

「そうか、僕……」

死んだんだっけ。

「どうしようからだがないとうちにかえれない」

エレベーターの行き止まりに追い詰められた俺の方へ、一歩一歩幽霊が近付いてくる。髪が生え際から流血し、手足が反対方向に折れ曲がり、だんだんと本来の……死後の姿に戻っていく。

「すいません、体を貸してくれませんか」

「だが断うぐ！」

低姿勢の申し出を一蹴しようとして、有無を言わず詰められた。亡者だと自覚したことで体が急激に崩壊している。霊が霊の自我を得た事でエレベーター内が異界化。非日常が日常に浸蝕し、操作パネルのボタンと照明がめちやくちやに点滅を始める。鏡面には壁に固定された俺が苦しみ悶える姿だけが切り取られていた。ああ、録画をチエックした警備員になんて思われるのか……

「くる、な」

44階のボタンが点灯し、ゆっくりドアが開いていく。

フロアに威風堂々立ち塞がっていたのは、アルマーニのスーツを颯爽と着こなす美青年。

両サイドに銀のメッシュが入った流れる黒髪、涼しげな切れ長の双眸。左手首に巻き付けてるのはこん畜生すつとこどつこいとか舌噛みそうなブランド名の銀時計。薄く整った口元には皮肉っぽい笑みが浮かんでいた。

「死刑台のエレベーターとはこういうたもんや」

エレベーターの到着を直々に出迎えた茶倉がにっこり微笑み、数珠を巻き付けた右手の甲を翳す。

「数珠サツクの右ストレートで往生せえや!!」

「ぎやあああああああ!」

真つ白な数珠が神々しい輝きを放ち、可哀想な幽霊が絶叫する。

流星の軌道を描く右ストレートを叩きこまれた霊が霧散し、エレベーター内に静寂が舞い戻る。

「茶倉……」

片手を伸ばして助けを求める俺を無視し、床に放置された袋を拾い上げて中をひつかき回す。舌打ち。

「アホか、どこに雑誌とアイス一緒に入れさすヤツがおんねん。ホンマ氣イきかんやつちゃ」

チャクラ王子がでかでか載った雑誌は、アイスの湿気を吸ってふやけていた。「しかもこれ黒蜜きなことやうやん、抹茶あんこやん。使えんのー」とさらにぼやき、自分の部屋に帰っていく。

俺はエレベーターの敷居の上に伸びたまま、薄情な背中から視線を切つてうなだれる。

「はよこい、閉めんで」

上半身だけ出して茶倉が促す。

二本足で立ち上がれるだけ体力が回復するのを待ち、壁に

縋って玄関へ行く。

部屋のドアに掲げられたプレートには、洒落た飾り文字で『tyakuraスビリチュアルセラピー』と綴ってあった。略して「SS」。

「トンデモスビリチュアル詐欺の間違いじゃねえの」
ティツシユにくるんだまま、捨て忘れたガムを取り出してプレートになすり付ける。